

『朱子訓蒙絶句』は如何に讀まれたか

—朱子學の普及と傳播の一側面—

白井 順

一、はじめに

『朱子訓蒙絶句』は、『全宋詩』にも収録され、朱熹の著作として永く讀み繼がれてきた、七言絶句凡そ百首から成る理學詩（メタフィジカル・ポエトリ）である。理學詩『齋居感興詩』全二十篇が、初めから宋本『朱文公文集』（正集・續集・別集）や『性理大全』に收められ、朱熹自身の手になる朱子學への良き道案内として廣く東アジア世界で讀み繼がれて行つたのに對して、『朱子訓蒙絶句』はそれと非常に似た作品でありながら、長い間朱熹の著作集に收められることはなかつた。

拙稿は、『朱子訓蒙絶句』について論じるものであるが、それ自體の眞偽やテキストの校定、善本は何であるかという純粹に書誌學上の問題を述べるわけでもなく、またその内容の検討や文學的な鑑賞法を論じるものでもない。明代においてこの詩篇は誰にどのように讀まれ、思想世界においてどのような役割を果たし、そしてそれは講學や出版とどのように関わっていたのか、といった問題が小論のテーマである。従來、『朱子訓蒙絶句』を扱った專論はほとんどなく、その存在さ

え知られていなかったと言つても過言ではない。近年、『朱熹集』に佚文として収録され、その後、朱熹の著作の集大成である『朱子全書』の佚文輯録に収録されなどして、徐々に整理されてきた。その佚文輯録の解題で、束景南氏は『朱子訓蒙絶句』について言及しているが、しかし朱子學の普及、ひいては朱子學の受容と展開におけるこの作品の位置については論及しておらず、ここに筆者が改めて『朱子訓蒙絶句』を取り上げる意味がある。

一、南宋・元における『朱子訓蒙絶句』

『朱子訓蒙絶句』とは何か。また、どのように讀まれていたのか。確認できる最古の資料として、徐經孫の一文を挙げたい。南宋末期の徐經孫（寶慶二年（1256）進士）は、晩年、四十年來の友で同郷の豐城出身の黃惟寅（季清）が註した『朱子訓蒙絶句』の跋文で次のように言う。

右訓蒙絶句五卷、晦庵先生朱文公の作る所也。其の註は則ち沈江黃君季清の述ぶる所也。謹んで按ずるに先生自序に謂えらく、病中に四書を默誦し、思う所に隨いて記すに絶句を以てし、後に

以て訓蒙者の五言七言の讀に代う。…其の訓蒙と曰うは、乃ち先生謙抑して敢て自ら盡道の辭と謂わざるのみ。季清是の編を研精すること年有り。一日心會かな理融け、句析し字解し、先生の言に因りて、先生の學を採り、或いは諸を章句集註に取り、或いは諸を文集語録に取り、又た參ずるに周・程・横渠・五峰・南軒・勉齋・西山の諸書を以てすること綱の如し。…絶句凡そ九十八首、「天」に始まりて「事天」を以て終う。…余と季清今は老いたり。

『訓蒙絶句』に収録される詩篇の數は九十八首、朱熹の自序が附されたものであった。徐經孫によると、タイトルに「訓蒙」と稱するのは、朱熹が敢えて自ら道を盡くすとしなない謙遜の言葉なのだといふ。朱熹が序で、兒童の暗誦詩「五言七言律詩」に代わるものだと言っているにもかかわらず、四書集註や道學書を参照して註を附した黃惟寅と徐經孫の兩人は、『朱子訓蒙絶句』は理學詩だと認識している。黃惟寅の註を擧げる。

詩題：命

靜思二五生人物 新者如源舊者流
流自東之源不息 始知聚散返而求

黃註：新とは源より來たりて窮まり無きが如き也。舊とは流れ往きて返らざるが如き也。

この註は、これから性理學を學ぶ者やすでに修得した者を念頭に置いて附されたものである。黃惟寅と徐經孫の兩人は、知識を積んでから『朱子訓蒙絶句』に接しており、朱熹が詩という形式を用いて性理學を表現したものであるという前提に立っている。しかしながら、『朱子訓蒙絶句』黃惟寅註は、性理學のスタンダードとして定着して

『朱子訓蒙絶句』は如何に讀まれたか

いった形跡はなく、その後の行方は分からない。

井上進氏によると、この時期には『程氏遺書』や朱熹の『語録』『文集』など、性理學の原典とも言うべき文獻が何種類も刊行されたが、元代に入ると「論著までもが、本來の形ではほとんど出版されなくなった」といふ。その一方、朱子學北傳の過程で、許衡に代表されるように各地で社學（鄉村教化機關）や家塾が盛に建設され、家塾や書院で朱子の書が系統的に學習できるような『小學書』（蒙學書Ⅱ初心者啓蒙書）による教育が推し進められた。

元の延祐二年（1315）に朱子學を基本とする科學が開始される。程端禮（1271-1345）は、元統三年（1335）『程氏家塾讀書分年日程』を刊行し、同書卷一の入學以下（八歳未入學前）『性理字訓』程逢源増廣の條で、次のように記す。

日々字訓の綱三五段を讀む。此れ乃ち朱子孫の芝老能く言うを以て、性理絶句百首を作り之に教うるの意なり。此れを以て世俗の蒙求千字文に代うるは最も佳し。又た朱子の童子須知を以て壁に貼り、飯後に之をして一段を記説せしむ。

ここでいう「性理絶句百首」とは、『朱子訓蒙絶句』に他ならない。朱熹が孫の芝老に教えた『訓蒙絶句』（「性理絶句」）に倣って、『性理字訓』を毎日數段暗誦させるといふのだから、『朱子訓蒙絶句』が元以降の兒童教育に影響を與えていたという證據である。八歳以下の兒童が暗誦するだけでは、當然理學詩を理解することは不可能である。程端禮は朱熹の作品の中身を理解させるよりも、『朱子訓蒙絶句』を暗誦詩として捉えていたことが分かる。しかし『程氏家塾讀書分年日程』では、朱熹が孫に暗誦させたという使用方法に重點を置きながらも、『朱子訓蒙絶句』そのものを暗誦させるのではなく、『性理字訓』

を暗誦させるといふ教育方向に轉換しているから、『性理字訓』のほうが『朱子訓蒙絶句』よりも現実的な需要に合っていたのだらう。このことは『程氏家塾讀書分年日程』という書名自體がコンセプトを示しているように、よりふさわしい教材を効率的に教えるという當時の性理學のあり方を物語っている。

ところで、『朱子訓蒙絶句』と『北溪字義』との關係について言及する数少ない研究者である張加才氏は、『朱子訓蒙絶句』は初心者のために思想概念の相互の繋がりを明らかにするもの、『北溪字義』は初心者用に思想概念の枠組みを確立するもの、という見解を提示している。朱熹の高弟・陳淳の文集の中に、『朱子訓蒙絶句』に關する記述はないが、『性理大全』にも節録される朱子學の用語を字書風に編集した『北溪字義』への連続性という流れを考慮すると、『朱子訓蒙絶句』は字義つまり性理ターム(用語)の概念規定を内容としており、詩歌という形式を用いて簡素化して概念を説明する、『性理字義』や『北溪字義』の前身ともいふべきもう一つの顔があったと考えられるのである。

『程氏家塾讀書分年日程』では採用されなかったけれども、『朱子訓蒙絶句』は蒙學書として讀まれるようになった。二元の蒙學書、熊大年(字は元誠、進賢の人)『養蒙大訓』^⑧を見てみると、次のような十種の書物で構成されている。

- 三言 陳淳『經學啓蒙』
- 四言 陳淳『初學經訓』、王柏『伊洛精義』、饒魯『性理字訓』、程端蒙『毓蒙明訓』、
- 胡寅『序古千文』
- 五言 陳淳『小學禮詩』、饒魯『訓蒙理詩』

七言 朱熹『訓蒙絶句』、朱熹『刊誤孝經』

これらは全て性理學の内容を三言・四言・五言・七言でまとめた理學詩であり、完全に兒童に暗誦させるスタイルになっている。序文によると、熊大年は世俗の童蒙書に不満を持ち、先儒たちの格言を集めて『養蒙大訓』を編纂し、それを『小學』の後に附録し、小學書を補い四書五經の表裏となるものとして次男に與えたという。

南宋時代と元代との決定的な違いは、『朱子訓蒙絶句』の受容者層と使用形態の變化である。朱子學の普及に伴う朱子學自體の變化、つまり蒙學書による教育對象の若年化と内容の簡素化によって、高度な理學詩であったものが、兒童のための暗誦詩として位置付けられ、『朱子訓蒙絶句』の内容を理解できなくてもよいという認識に變化したのである。極論すれば、『朱子訓蒙絶句』を暗誦することに意義があるのであって、内容の理解は目標とされなかった。このように朱熹が「訓蒙」と言った本来の使用形態を重視したことによって、朱熹が四書を読んで作詩したという高度な哲學的内容であったのに、蒙學書というレッテルが貼られることになった。

三、明代における『朱子訓蒙絶句』と『朱子性理吟』

前述のとおり、『朱子訓蒙絶句』を収録した『養蒙大訓』は、人格陶冶の書物として評價され、弘治・正徳年間になると、全国的に同じようであったかどうかは定かではないが、社學で『養蒙大訓』を使うようになっていた。廣州では胡居仁に私淑した魏校(1483—1543)も、正徳十六年(1521)八月、社學で使ったことを記しており、『養蒙大訓』は、當時流布した書物であった。天順四年の進士で、弘治年

間に『憲宗實錄』や『大明會典』に携わった張元禎(1437—1507)は、皇太子の教育に關して、次のように上奏している。

今 孝經・詩經・小學、俱に朱子の考正・集傳等の書有り。朱子感興詩及び訓蒙詩も、亦皆緊要なり。

『感興詩』は、『朱子文集』を始め『性理大全』にも收録されているから、當時必讀とされたのは想像に難くないが、『朱文公文集』未收録の『訓蒙詩』までも重要だというのは、當時高い評價を得ていたことを裏付けるものである。では、實際『朱子訓蒙絶句』はどのように扱われていたかといえ、明代前半期の儒學に大きな影響を與えた吳與弼(1391—1469)の次のような絶句が参考になる。

連日禪房晝夢濃 連日 禪房に晝夢濃く

人情物理靜時功 人情 物理は靜時の功

宵來更擬尋瀟洒 宵來たりて更に瀟洒を尋ねんと擬し

淨几明窓寫訓蒙 淨几明窓に訓蒙(朱子訓蒙詩)を寫す

この「訓蒙」は割註によると『朱子訓蒙詩』であり、吳與弼は蒙學書としてではなく、自らの功夫の爲に『朱子訓蒙絶句』を寫している。彼は、日々『晦庵文集』を枕元に置いて讀んだり、ある夜には「感興詩」を門人に説いたり、朱熹を夢に見るほど朱熹を信奉していた。更に彼の門人で、講學のカリスマ胡居仁(1434—1504)も、『居業録』で次のように言う。

意とは、心に専主有るの謂なり。大學解に以て心の發する所と爲すは、恐らく未だ然らず。蓋し心の發は、情也。惟だ朱子訓蒙詩に「意は乃ち情専ら主どる所の時」と言うを近しと爲す。

また、明代中期、胡居仁の門人で、王陽明とも交流のあった夏東巖(1466—1538)も『言』。

『朱子訓蒙絶句』は如何に讀まれたか

道理は是れ個の甜き物事なり。朱子訓蒙詩に云く、「行う處心安んじ、思う處得れば、餘甘、嘗に齒牙中に溢る」と。譬喩にあらざる也。

これらの資料から分かるように、こうした思想家たちは、兒童に教えるためではなく、自らの功夫や講學の爲に『朱子訓蒙絶句』を活用している。特に胡居仁の言葉は、明末劉宗周の語録にも引用され、清代胡渭、ひいては朝鮮・日本にまで影響を與えた。胡居仁や張元禎らは、成化・弘治年間における講學活動の中心的人物であり、彼らは講學の實踐の場で、哲學的な理解を助けるものとして『朱子訓蒙絶句』を取り上げており、初級者でも知っている身近な著作であったことが窺える。この時期『朱子訓蒙絶句』は、性理學書と蒙學書という二つの顔を持っていたのである。

正徳七年壬申(1512)に譚寶煥が『性理吟』二卷(『四庫全書存目叢書』所收)を著述したことによって、『朱子訓蒙絶句』は大きく展開することになった。譚寶煥は『性理吟』自序で次のように述べている。

朱子の著述は川嶽より繁し。人 片言を得て、珍とすること珠璧の如し。余 其の訓子短吟を讀むに、自序に云く、己亥春、病を以て書を廢し、四書註を默誦し、思う所に隨いて記すに絶句を以てすること幾んど百篇、用て今の訓蒙五七言律詩に代うる也と。竊かに惟うに唐人の音韻、聲は金石を越え、初學の才思を開發するは則ち可なるも、而れども性功に裨無し。

譚寶煥は、題名を『訓子短吟』としているが、右の引用文をみると、彼が讀んだものは『朱子訓蒙絶句』自序とほぼ同文だから、『朱子訓蒙絶句』であることに間違いはない。譚寶煥は、唐代の「五言七言律

詩」が、性理學を修めるには何の助けにもならないと言ひ、彼もまた自らの學問のために『朱子訓蒙絕句』を讀んだことが窺える。彼は、續けて次のように言う。

余 味を尋ぬること之を久しくし、漫りに朱註を披り、篇端に臚列し、其の宗旨を明らかにして、而して又竊かに遺意を取り、釋を東家に效ひ、續くるに七言五韻□□百首を以てして、署して性理吟と曰う。其の中に朱子の已に詠む所と爲る有り、朱子の未だ詠まざる所と爲る有り。要は皆朱子の言わんと欲するところの意を闡かにす。

「朱子の已に詠む所」とは『朱子訓蒙絕句』のことであり、「朱子の未だ詠まざる所」は朱熹が云わんとするところの遺意を闡釋して譚寶煥が作詩したものを指し、それにも彼自身が註を附した。つまり、『性理吟』二卷の構成は、前集七言絕句九十二首が『朱子訓蒙絕句』であり、後集七言律詩四十九首が朱熹に倣って譚寶煥が作詩したものである。そしてこの二卷全體を『性理吟』としたのは譚寶煥自身の命名に係る。その註は、彼自身が序で述べているように、「朱子曰」という形式を取り、朱熹の詩篇の隣に『集註』や『語錄』から拾ひ集めた朱熹の語を並べ、「命」「意」「芻象悦口」といった詩題、つまり性理學の重要概念を明確にしようとするものである。だから、同じ詩題で二首ある場合、註は一つしかない。

詩題・命

譚註：朱子曰く、上天の載は是れ有中に就きて無を説き、無極にして太極は是れ無中に就きて有を説く。

靜思二五生人物 新者如源舊者流
流即東之源不息 始知聚散即斯求

譚寶煥は、詩題としての性理學タームを重視し、先に引用した胡居仁・夏東巖同様、『朱子訓蒙絕句』は詩篇的性理學用語集であるという認識を持っている。譚寶煥『性理吟』後集は、譚寶煥が朱熹になりかわり、道・格物・四端など四十九個のタームについて七言律詩で詠い、前述のように更にその詩に前集同様「朱子曰」という形式で譚寶煥自身が註を附したものであった。ところが譚寶煥の死後、何者かが譚寶煥の註を削除した『朱子訓蒙絕句』と譚寶煥作の四十九首の七言律詩（約百五十首）とを合わせて『性理吟』とし、ここに改めて『朱子性理吟』約百五十首が誕生することとなった。『性理吟』後集（七言律詩四十九首）は譚寶煥作であるのに、朱熹の著作となつてしまつたのである。そしてこの『朱子性理吟』は、「訓蒙」という題名が無くなつたことによつて、蒙學書ではなく高度な理學詩として廣まつていった。萬曆乙巳三十三年（1605）、この年四十三歳の高攀龍が『朱子性理吟』を重梓した際、無錫で書いた序文で、次のように言う。

昔者、子朱子嘗て六經四子中の要義を取り、約して韻語と爲し、命じて性理吟と曰ひ、以て其の子芝老を訓う。金川車公名は振なる者、其の祖松坡公に受け、松坡之を五河李先生に得、李之を雙峰饒先生に得、饒之を勉齋黃先生に得。黃は則ち親しく師授を承くる者也。天順中、車公常州府司理と爲り、常に刻し、其の板を攜えて歸るも火に燬かる。嘉靖中、車公の壻 饒公名は傳なる者、汀州府司理と爲り、汀に刻す。今年予、維城張公を武林に訪ね、得て之を珍として曰く、信に朱子にあらざれば作ること能わずと。……夫れ因りて之を重梓し、以て其の傳を廣めん。萬曆乙巳孟夏、後學錫山高攀龍書す。

上述の通り、譚寶煥は、天順年間には存在していないから、當然車

振が『性理吟』を出版できるはずはない。しかも、高攀龍は譚寶煥の註についてなにも觸れていない上に、嘉靖年間の『晁氏寶文堂書目』卷上(四書類)には『性理吟』が著録されているから、嘉靖年間にはすでに、譚寶煥が朱熹に成り代わって作詩した四十九首が、無註のまままで流布していたことになる。高攀龍の序文によると、彼は張維城が手に入れた『朱子性理吟』を見て以来、長い間出版したいと思っていて、姻戚の楊爾亮が重梓する際に自分の序を附したという。彼より先に『朱子性理吟』を杭州で手に入れた友人張維城は、許孚遠の弟子で、周自淑とともに『許敬庵先生語要』を刻した人物であり、思想的な傾向が窺える。いずれにせよ、嘉靖中に饒傳が福建で出版した時に、朱熹の著作だと假託したのか、或いはすでに當時から朱熹の著作だと誤解されていたのかは分からない。

高攀龍の序文は、『朱子性理吟』という名をもつ版本には等しく載せられ、この書の來歴を證明する根據となっていた。前掲『朱子全書』所收「朱子佚文辨偽考録」性理吟の箇所(註)で東景南氏は大意、「朱培『文公大全集補遺』には性理吟という題名で、七言絶句以外に四十九首の七言律詩を載せており、朱啓昆『朱子大全集補遺』もまた同様である。黄榦より親しく師授を承けて世に廣く傳わったと言うが、思うにこの七言律詩四十九首は偽作であろう」と整理している。「朱熹集」『版本考略』によれば、明末朱培『文公大全集補遺』は、内容が豊富であるけれども収録されるものの中には偽作も少なくないという。このように、嘉靖・萬曆から『朱子性理吟』約百五十首全てを朱熹の著作とする流れが確認でき、『朱子性理吟』が短期間に廣まっていた事実が判明する。

一方『朱子訓蒙絶句』は、『朱子性理吟』の登場によって驅逐され

『朱子訓蒙絶句』は如何に讀まれたか

たわけでも消滅したわけでもなく、脈々と讀み繼がれていた。先に擧げた嘉靖年間の藏書家・晁瑛『晁氏寶文堂書目』卷上(詩詞)には「校定晦翁感興詩」と竝んで「文公先生訓蒙絶句」が著録されており、當時『朱子性理吟』と竝存していたことが分かる。康熙壬寅六十一年(1722)朱熹の子孫・朱玉が編集し、清代朱熹の著作全集として權威をもった『朱子文集大全類編』は『訓蒙詩』を収録するが、當然『性理吟』七言律詩は含まれていない。また『四庫全書存目叢書』所收の既述の譚寶煥『性理吟』二卷には、乾隆十九年の朱鳳英の跋文が附してあり、朱鳳英は「前に朱子家訓を列し句九十八首を載せ、而して朱子語を纂して七言律を演じ、以て後誌の宗とする所を繋ぐ也」と述べ、『朱子訓蒙絶句』が『朱子家訓』に附してあったことを證言している。

『朱子家訓』、又の名『朱子治家格言』は、清代朱用純(柏盧)が編集した日常生活での兒童教育書で、日本でも刊刻されて廣く讀まれ、現在でも香港版通書に掲載されている。これは清代における『訓蒙絶句』のあり方を物語るもので、蒙學書の位置付けにおいてより宗族に近いものとして明代とは異なる讀まれ方をしたようだ。

このように、朱熹關連の書物の再評價と編纂の過程で、『朱子訓蒙絶句』と『朱子性理吟』が竝存することになった。しかしながら、清代に入って朱子學回歸の流れに伴って、康熙年間にはすでに、約百五十首すべて朱熹の著作とする見解がかなりあったようである。康熙癸亥二十二年(1693)、朱熹の諸論を集めて二十三門に分類し『朱子學歸』を編集した鄭端は、その掉尾の「詩教」に、『朱子性理吟』全百四十八首を載せている。『性理吟』約百五十首は朱熹の著作であるという誤解はすでに定着していたようで、『四庫全書』所收の『兩宋名賢小集』にも朱熹の著作として収録されている。

また尤侗 (1618—1704) 『西堂餘集』には『性理吟』二卷が収録されているが、それをみると『朱子訓蒙絶句』は含まれておらず、譚寶煥作の七言律詩四十九首のみを朱熹の著作として収録している。尤侗は巻頭に高攀龍の序文を載せ、『性理吟』四十九首を「朱熹晦庵撰」と記しているから、朱熹が作詩したものだと思われていたのである。その四十九首の後には、尤侗自身が『性理吟』に倣って同じ詩題で作詩した『後性理吟』四十八首を載せている。

清末同治十二年 (1873)、賀瑞麟は日常生活での規範を集めた『學規七種』と『養蒙書九種』を編集し、『養蒙書九種』には『訓蒙詩』を収録し、それに後文を記した。その後文において『朱子訓蒙絶句』と『朱子性理吟』との關係がやっと初めて明確に指摘されたのだ。⑧

四、東アジアの中の『朱子訓蒙絶句』

前章で『朱子訓蒙絶句』と『朱子性理吟』の關係について述べたが、東アジアの儒教文化圏に視野を擴げてみると、實に興味深い事實が浮かび上がってくる。ちょうど『朱子性理吟』が生み出される嘉靖年間に、朝鮮の大儒・李退溪 (1501—1570) は『朱子訓蒙絶句』を讀んでいる。彼は李剛而宛の手紙の中で『訓蒙絶句』を論じて次のように言う。

示諭さる訓蒙詩、胡敬齋も亦以て朱先生の作と爲し、混も亦曾て之を見る。然れども混嘗に反覆參證するに、但だ義理の疎なるのみにあらず、意味も亦淺し。但だ意味の淺きのみにあらず、文詞も又休歇す。且姑らく以上の三者は論ぜず、只だ其の命題の立訓大概の規模を看れば、已に先生の手に出づるにあらざるを覺ゆ。其の末に乃ち先生の二絶句を櫛み取り、附し入れて刊行し、是れ

を以て天下後世の人を瞞むき、以て其の上の諸詩の皆先生の作たるを明らかにせんと欲す。磁硯美玉の終に合して一と爲すべからざるを知らざる也。⑨

李退溪は、胡居仁の影響で『朱子訓蒙絶句』を讀んでおり、彼は自らの學問のために讀んだという。しかしながら、李退溪は『朱子訓蒙絶句』の内容の淺さや措辭の拙劣さから、朱熹の手に成るものではないと考えた。『朱子訓蒙絶句』巻末の「二絶句」が朱熹の作であるから、それに託して全てを朱熹の作品だと思わせようとしたと、僞作説の根據を述べている。

當時、僞作説が主流であったわけではなく、先述したように明の張元頌が皇太子教育に使用することを進言したことと同様、朝鮮の朴齊仁 (1536—1618) も太子に『朱子訓蒙絶句』を讀ませたことを記し、次のように言う。

右絶句一百有二首、晦庵先生の作る所也。皆庸學語孟の中の緊要なる格言を以て題と爲し、一句一絶、各おの工程の明白簡易なる有り。誠に學者の徳の指南にして、詞人の物に觸れ興を寓する若きの浮華益無きの比にあらず。⑩

朴齊仁は、朱熹の著作であると信じ、中庸・大學・論語・孟子の重要な格言 (タムム) を題として「人徳の指南」になるから、是非讀むべきものだと言張する。また朝鮮では他にも、李普 (畜庵) は、次に引くように自らの心と體の病を治すために、自分を律する格言を古今の儒書から抜き書きしたが、その中には『訓蒙絶句』も含まれていた。

上は孔孟程朱より、下は宋元諸儒に至るまで、格言至訓及び擊壤集、感興篇、訓蒙絶句、凡そ己を律するに緊なる者、必ず括出裏

集して、之を取ることも多きも其の繁を厭わず。

朴齊仁や李普の資料は、朝鮮王朝前半期における『朱子訓蒙絶句』の評價と讀み方を示すものであるが、實際にはその後、朝鮮では李退溪の『朱子訓蒙絶句』に對する否定的見解が深く朝鮮朱子學に影響を與えていた。そういう風潮の中にあつて朴世采(1631—1695)は、『朱子大全』に収録されていない朱熹の作品で贋作と疑われるものもすべて収録した『朱子大全拾遺』を編集した。朝鮮版『朱子大全』遺集卷一には、冒頭に『朱子大全拾遺』朴世采(南溪)の跋文を引用して、次のように云う。

南溪の拾遺跋に曰く、晦庵大全並びに續・別二集、俱に世に行わる。然れども今拾遺する所は幾んど數百餘條に至り、釐めて六卷と爲す。……噫、且如えば訓蒙詩諸篇は、年譜に出づと曰うと雖ども、而れども嘗て退溪李先生に深く貶しめらるる所にして、其の論頗る詳し。然れども猶お傳述の已に久しきを以て、敢えて輒刪せず。

その後、朝鮮王朝後期になつて『朱子性理吟』が傳播した。朴世采『朱子大全拾遺』所收「訓蒙絶句」と『朱子性理吟』を校勘したのが洪啓禧(1703—1771)である。

癸酉(1753年)に記された洪啓禧の跋文を載せる、高攀龍著『朱子性理吟』二卷は、朝鮮で出版された版本である。この朝鮮版『朱子性理吟』二卷は、他の中國の版本とは大きく異なつた總目(カテゴリー)と註を備えている。編集者は七言絶句九十三首、七言律詩四十八首、計百四十首餘りの全てを朱熹が作詩したものと考え、性理學的な見地から詩篇をカテゴリーに分け、卷一「道體」・「爲學」・「聖賢」、卷二「道體」・「爲學」・「盡分」・「希聖」とし、その總目の下には、例えば

『朱子訓蒙絶句』は如何に讀まれたか

「孔子 顔子 曾皙 曾子 閔子騫 子路 伊尹 太公」などと記して、どの詩篇が何を詠つたものに當たるかを明示している。更にまた、全首にはないけれども、割註が附されている詩篇もあり、例えば「志」と題された詩句中(七言律詩)、「懦而無立事難爲、始焉趨向尤當辨」には、「胡敬齋曰く、正に趨向 其の志を立つるを以てするも亦此の意也」と、明儒の性理學上の理解にまで及んでいる。卷末には甲戌(1754年)に記された「考異」を附している。中國で出版された版本の中に、このような胡敬齋を引用する註が付いたものはなく、朝鮮独自の讀み方であると言えよう。同時にこの獨自性こそ、『朱子性理吟』が朝鮮で理學詩として熱心に讀まれたことを裏付けるものである。洪啓禧の跋文によると、この版本は、張伯行『養正類編』を底本にして、朝鮮で出版されたものであると言ふ。朱熹の詩篇の中でも最も重視された「齋居感興詩」と表裏をなすものだと洪啓禧は喜び、『朱子大全遺書』には載せていないからといって疑ふ必要はないとして、高攀龍の序文が述べる來歴を信じている。ところが、この翌年、洪啓禧は朴世采『朱子大全拾遺』を用いて『朱子性理吟』を校勘し、「考異」を記して次のように言ふ。

篇名性理吟 訓蒙絶句に作る。篇名の下に別の小序有り。道體・爲學等の總目は並べて無し。予之を讀みて瞿然として曰く、退溪先生の言、此くの如くんば則ち誰か敢えて硬く己が見を主として以て必ず朱子より出づと爲さんや。余未だ退溪の書を見ずして、徑ちに此の篇を刻す。誠に不敏を愧ず。然れども既に之を刻せり。並べて其の顛末を後に附し、以て自訟の意を致すとしか云う。

校勘の過程で、洪啓禧は『朱子訓蒙絶句』であると分かり、李退溪

の論證を讀む前に出版してしまつたことへの自責の念を記している。李退溪を論據とするならば、『訓蒙絶句』同士で校勘しなければいけないのに、洪啓禧の「考異」は、『朱子訓蒙絶句』と『朱子性理吟』とを比べたものに過ぎない。しかし洪啓禧と同時期の乾隆三十七年(1772)に編纂された『四庫全書總目提要』では、『性理吟』の解題中『朱子訓蒙絶句』について一言も觸れていないから、朝鮮ではいち早く兩書の異同を把握していたことが分かる。ここに、朱熹の手になるものかどうかをはっきりさせることが重要であつた朝鮮儒學の風土が窺える。現在、朝鮮本『朱子性理吟』は、韓國國立圖書館を始め、梨花女子大學など種々の機關で所藏されており、廣く傳播したことを推測せしめる。

一方、日本ではどうであつたか。朱熹の教條を崇信して、李退溪にも傾倒していた山崎闇齋(1618—1682)が『朱子訓蒙詩』を出版している。明曆三年(1657)、彼は跋文で次のように言う。

右詩九十八首、之を朱先生文集に考うるに、惟だ易の詩のみ之れ有るも、命以下有る無し。按ずるに、明の正徳年間、新安程叔玉之を其の輯むる所の晦庵詩集に載するも、訓蒙の號無し。叔玉の序に云く、易・命・太極・先天・體用・居敬・人心道心・一貫・克己・感興の諸作、皆道體の蘊奧を發明し、孔孟の心法を表章し、以て歷代の治亂に及ぶこと、諸れを掌に指さすが如し。漢唐の諸作、安んぞ同日に語るを得んや、と。

右の記述によれば、正徳年間に出版された『晦庵詩集』にはもともと『訓蒙詩』という題名がなかつたことが分かる。またその詩集に收められた程叔玉の序によると、「易・命・太極……」という九十八首の順序で排列され、「感興詩」を附すものであつた。明代に比較的影

響力のあつた選集は、正徳十六年新安程據編刻『晦庵先生朱文公詩集』十二卷で、山崎闇齋が證言する正徳年間の『朱子訓蒙絶句』という名稱が無かつた版本はこれのことかもしれない。彼は續けて、以下のやうに考證する。

又朝鮮の吳祥が跋する所の本に題して訓蒙絶句と號し、其の下に文公朱先生撰すと曰い、卷頭に易の詩無けれども天の詩有り(割註)、優游厭飮の詩有り(割註)、卷末に觀書有感二詩を載す(割註)。中間九十六首(割註)凡そ一百首也。斯の詩胡敬齋は之を信用し、李退溪は之を誹議す。敬齋用いる所は未だ其の孰れの本なるかを知らず。退溪の議する所は、則ち正に吳が本也。予向きに敬齋に依りて之を信するも、後來以謂らく退溪の議は是を得たりと。

山崎闇齋によると、李退溪が見た『朱子訓蒙絶句』の版本は、朝鮮で出版された吳祥の跋文を載せる『晦庵詩集』であるという。その卷末には「觀書有感」二詩があつたと證言するから、李退溪が論據として提示した「卷末二絶句」は「觀書有感」二詩のことである。山崎闇齋は、程叔玉本を底本とし、題名だけ朝鮮版の「訓蒙絶句」を取つて出版した。山崎闇齋は跋文で、最初胡居仁を信じていたのだが、後に李退溪の説を支持するようになったと告白しているが、当初は朱熹の作だと信じていた。とまれ、彼もまた自らの學問のために讀んだようだ。しかし、彼は多くの門人を抱えていたにもかかわらず、彼が出版した『朱子訓蒙詩』は、現在數箇所所蔵されるに止まり、日本朱子學界においてそれほど讀まれたわけではなかつたように思われる。

その後日本では、維新时期に九州平戶藩において、崎門學派の楠本端山の弟碩水(1832—1916)が『朱子性理吟』を抄寫している。『碩水

先生餘稿』卷一「朱文公性理吟贈本敘」^②で、次のように言う。

近ごろ文公朱先生の性理吟を読み、竊かに以爲らく初學の士、此の詩を吟咏し、其の意を玩味すれば、則ち風流慷慨の害無くして、聖賢の大道を進むに益有るに庶幾し。此の書朱子文集に載せずと雖も、而れども明の高忠憲先生嘗て序文有り。其の傳は歴史として知るべき也。因りて數本を臚寫し以て同志の諸友に頒つと云う。

嘉永七年甲寅九月。

敘文によると、嘉永七年(1854)、二十二歳の碩水が『朱子性理吟』を讀んだ時、入門者にとって有益な書物であると感じたという。楠本碩水が寫した版本は、現在九州大學碩水文庫に所藏されている。この版本は巻頭に高攀龍の序文を載せ、七言律詩四十九首を收録し、巻末には慶應二年(1856)尤侗『西堂全集』にもとづいて寫した、と記されている。岡田武彦氏によると、楠本碩水は朱子學を遵奉する吳與弼と李退溪、それに明末に新朱子學を唱道した高攀龍に傾倒した。楠本碩水以外にも、尤侗『西堂全集』を寫した版本は、東京都立中央圖書館(中山久四郎文庫)が所藏している。このように、日本における『朱子訓蒙絶句』と『朱子性理吟』の傳播は、朱子學というよりも李退溪や高攀龍に付隨した關心であったため、實際には日本朱子學の主流に關わることがなかったと考えられる。結局、日本には、『朱子訓蒙絶句』と尤侗『西堂全集』の「性理吟」が傳來したに過ぎず、朝鮮版『朱子性理吟』や中國版『朱子性理吟』等は傳わらなかったようである。

注

(1) 『全宋詩』卷二三八三、北京大學出版社、1998年。

『朱子訓蒙絶句』は如何に讀まれたか

(2) 吉田公平「宋本『朱子文集』について」、『東北大學教養部紀要』第46號、1985年。宋刊本は、「古詩」百七十二首と並べて「齋居感興詩」二十首が置かれ、通行本である嘉靖十一年重刊「晦庵先生朱文公文集」(四部叢刊)とは大きく異なることが指摘されている。

(3) 『朱熹集』第九冊、朱熹外集卷一、四川教育出版社、1985年。朱傑人・嚴佐之・劉永翔主編『朱子全書』、上海古籍出版社・安徽教育出版社、2002年。

(4) 『朱熹佚文輯考』「朱熹作『訓蒙絶句』考」、1991年、687頁。東氏は『養蒙大訓』に『訓蒙絶句』が收録されていることや、明儒が講學に『訓蒙絶句』を使用していたこと、賀瑞麟や李退溪の考察などについては一切觸れていない。

(5) 『矩山存稿』卷三「黃季清註朱文公訓蒙詩跋」。「朱子全書」佚文輯録「訓蒙絶句」巻頭に自序があるが、それはこの跋文から採っている。

(6) 「右訓蒙絶句五卷、晦庵先生朱文公之所作也。其註則沈江黃君季清之所述也。謹按先生自序謂、病中默誦四書、隨所思記以絶句、後以代訓蒙者五言七言之讀。…其曰訓蒙、乃先生謙抑不敢自謂盡道之辭云耳。季清研精是編有年矣。一日心會理融、句析字解、因先生之言、探先生之學、或取諸章句集註、或取諸文集語錄、又參以周程橫渠五峰南軒勉齋西山諸書如綱。…絶句凡九十八首、始於天而以事天終焉。…余與季清今老矣。」

(7) 「新者如源來無窮也。舊者如流往不返也。」

(8) 井上進「中國出版文化史」、名古屋大學出版會、2002年、178頁。

(9) 「日讀字訓綱三五段。此乃朱子以孫芝老能言性理絶句百首教之之意。以此代世俗蒙求千字文最佳。又以朱子童子須知貼壁、於飯後使之記說一段」(『四部叢刊』所收『程氏家塾讀書分年日程』卷一)

(10) 朱熹に「芝老」という孫はいないし、『養蒙大訓』では「芝兒」となっている。また成立年代についても、「四書註」とあるのに従えば、『四書集註』が完成した、紹熙元年(1190)朱熹六十一歳以降になる。しかし

「乙亥春」(紹興二十五年(1155) 朱熹二十六歲)、更に別本では「己亥」とあるのに従えば、淳熙六年(1179) 朱熹五十歳のことになり、故に未だ不明である。東景南『朱子大傳』(2009頁)では、『朱子訓蒙絕句』は隆興二年(1164) 朱熹二十五歳の時の作であるとしている。

(11) 鈴木弘一郎『程氏家塾讀書分年日程』について、『中國哲學研究』第15號、參照。

(12) 張加才『詮釋與建構—陳淳與朱子學』、人民出版社、2004年、120頁。

(13) 京都大學人文科學研究所所藏『養蒙大訓』一卷(碧琳琅館叢書)に収録される『朱子訓蒙絕句』は九十八首で、誰の註もついていない。『朱子訓蒙絕句』九十八首が終ると、丁を改めて再び『訓蒙絕句』という標題が附せられ、『觀書有感』二首と『武夷權歌』十首、さらに「感興詩」が收められている。なおこの『養蒙大訓』所收『朱子訓蒙絕句』の自序と、南宋徐經孫の序文には異同がある。

(14) 『養蒙大訓』目録「熊」大年、後至元丁丑(1337)春、家居閒中溫繹小學書畢。因取積年苦心於師友得諸儒集撰之格言大訓、編錄類次、爲易難先後、以授次兒。嘗恨世俗童蒙養正之訓不明、編成總題其端曰養蒙大訓、以附小學書後、而羽翼之繼……」

(15) 明代初期の藏書家・楊士奇は「童子を教うるに甚だ宜し、端本澄源の書なり」と言ふ。『東里文集』卷十「書養蒙大訓後」。

(16) 『山西通志』卷九十六に「孫磐、遼東人。弘治閒以進士知陵川縣、抑豪強恤孤弱、使貧富各得其所、尤殫心風教、窮鄉僻立社學、集養正篇小四書養蒙大訓、悉爲刊布之」とある。『小四書』とは、方逢辰「名物蒙求」、程若庸「性理字訓」、陳傑「歷代蒙求」、黃繼善「史學提要」の四冊の蒙學書(いずれも四言で構成)を、元末明初の朱升(1299—1370)がまとめたもので、『小四書』と並べて『養蒙大訓』は社學で使われていた。

(17) 『莊渠遺書』卷九「嶺南學政」の條。

(18) 「今孝經詩經小學俱有朱子考正集傳等書、而朱子感興詩及訓蒙詩、亦皆緊要。」(張東白先生文集)卷二十三)

(19) 『康齋集』卷七「太平寺」。

(20) 和刻本『康齋先生日録』第十九葉。

(21) 「意者、心有專主之謂。大學解以爲心之所發、恐未然。蓋心之發、情也。惟朱子訓蒙詩言意乃情專所主時爲近。」(居業錄)卷八)

(22) 「道理是個甜的物事。朱子訓蒙詩云、行處心安思慮得、餘甘嘗溢齒牙中」非譬喻也。」(夏東巖集)卷一)また他の條にも見られる。

(23) 「胡敬齋曰、心有專主之謂意。朱子釋訓蒙詩曰、意是情專所主時近之。大學章句以心之所發言、恐未然。愚謂敬齋亦近之、而未盡也。」(劉子語錄)

(24) 『大學翼眞』卷四。

(25) 『四庫全書總目提要』集部、卷一七六によると、譚寶煥は正徳年間の江西樂安の人で、『樵海集』六卷を残すが現存しない。『四庫全書存目叢書』所收、吉林省圖書館所藏、康熙十九年、譚作梅刻本『性理吟』二卷には、卷頭に清の朱鳳英が乾隆十九年に記した跋文と、譚寶煥が正徳七年(1511)に記した自序が並べられ、自序の後に七世裔孫作梅が成書の經緯を乾隆十九年に記したものが附してある。

(26) 「朱子著述繁於川嶽。人得片言、珍如珠璧。余讀其訓子短吟、自序云、己亥春、以病廢書、默誦四書註、隨所思記以絕句幾百篇、用代今之訓蒙五七言律詩也。竊惟唐人音韻、聲越金石、開發初學才思則可、而性功無裨焉。布帛菽粟、易知簡能、無如文公朱子訓子一篇、蒙以養正甚善也。」

(27) 似た名稱の著作に『朱子訓子帖』一卷があるが、これとは別のもので、恐らく『訓蒙絕句』の別稱であろう。

(28) 「余尋味久之、漫據朱註、臚列篇端、明其宗旨、而又竊取遺意、效顰東家、續以七言五韻□□百首、署曰性理吟。其中有爲朱子所已詠、□□朱子所未詠。要皆闡朱子欲言之意。」

(29) 「朱子曰、上天之載是就有中說無、又極而太極是就無中說有。」又「は、上の「無」一字の反復符號であろう。

(30) 「昔者、子朱子嘗取六經四子中要義、約爲韻語、命曰性理吟、以訓其子芝老。金川車公、名振者、受於其祖松坡公、松坡得之五河李先生、李得之雙峰饒先生、饒得之勉齋黃先生。黃則親承師授者也。天順中、車公爲常州府司理、刻於常、攜其板歸燬於火。嘉靖中、車公增饒公名傳者、爲汀州府司理、刻於汀。今年予訪維城張公於武林、得而珍之曰、信非朱子不能作矣。……夫因重梓之以廣其傳焉。萬曆乙巳孟夏後學錫山高攀龍書。」(尤侗『西堂餘集』東北大學所藏による)。また、『四庫全書』所收『高子遺書』卷九上「朱子性理吟序」には、續きがあり「予欲重梓此編久矣。而忽忽逾歲、今乃得吾姻家楊爾亮梓之、爾亮而好此也、亦度越時俗也哉。予見張無垢作論語吟、後人多繼其響者、大都以譚機說聖學、面目不相似也」とあり、高攀龍の姻家の楊爾亮が出版した。

(31) 『朱子全書』第26冊、303頁。

(32) 『朱子全書』第26冊、303頁。

(33) 『朱熹集』第10冊「版本考略」308頁による。

(34) 『四庫全書存目叢書』所收、雍正八年重刻本。

(35) 明代後半期は陽明學が盛行したことは言うまでもないが、東林派の顧憲成・高攀龍らは朱子學的色彩の濃い思想家たちである。清代康熙・雍正期には、李光地『朱子全書』・張伯行『近思錄集解』『正誼堂全書』などに代表される朱子學の集大成書が編纂されている。

(36) 『朱子性理吟』は元代には存在しないし、ましてや譚寶煥が作詩したものを朱熹の作品に誤入しているのだから、『兩宋名賢小集』所收「性理吟」の成立は譚寶煥より後であることは動かし難い。『兩宋名賢小集』は、百八卷本、二百十五卷本、三百六十六卷本の三種類(いずれも清抄本)があるが、百八卷本には「性理吟」は収録されていないし、『四庫全書』の底本となったのは、清朝に補われた三百六十六卷本である。

『朱子訓蒙絕句』は如何に讀まれたか

(37) 上海圖書館所藏『養蒙書九種』は、同治四年(1865)の楊仁甫訂正本に據ったもので、『朱子學歸』と校勘して絶句百首の後に絶句四首を付け加え、その後に跋文を載せる。

(38) 「右訓蒙詩百首、朱子大全集不載。國朝先生裔孫玉重編文集乃附入焉。元程良齋讀書日程所謂性理吟絶句百首、當即此詩。明高忠憲刻性理吟不曰訓蒙、想亦兩名之耳。獨忠憲所刻絶句止九十四首、而又有七律四十九首、七律中語多可疑、絕不類朱子手筆、忠憲豈未之詳耶。」

(39) 「示諭訓蒙詩、胡敬齋亦以爲朱先生作、混亦曾見之。然混嘗反覆參證、非但義理之疎、意味亦淺。非但意味之淺、文詞又休歇。且以上三者姑不論、只看其命題立訓大概規模、已覺非出於先生之手。其末乃攬取先生二絶句、附入刊行、欲以是瞞天下後世之人、以明其上諸詩之皆爲先生作。不知、硃硃美玉之終不可合爲一也。」(『退溪全書』卷二十一「答李剛而」)

(40) 「右絶句二百有二首、晦庵先生所作也。皆以庸學語孟中緊要格言爲題、一句一絶、各有工程明白簡易。誠學者人德指南、非若詞人觸物寓興浮華無益之比。」(『篋岳先生文集』卷二「書上訓蒙絶句于王子君因以獻規」)

(41) 「上自孔孟程朱、下至宋元諸儒、格言至訓及擊壤集、感興篇、訓蒙絶句、凡繫於律已者、必括出哀集、取之多而不厭其繁。」(『澗松集』卷三「養病心鑑王靜銘後跋」)

(42) 清の王懋竑『朱熹年譜』(中華書局)には見えない。同書附録「後世學者所輯關於朱熹的書籍」に收載する「朱子訓蒙詩百首」は編者何忠禮氏が付加したものである。

(43) 「南溪拾遺跋曰、晦庵大全竝續・別二集、俱行于世。然今所拾遺幾至數百餘條、釐爲六卷。……噫、且如訓蒙詩諸篇、雖曰出於年譜、而嘗被退溪李先生所深貶、其論頗詳。然猶以傳述之已久、不敢輒刪。」

(44) 洪啓禧は、1788年に朝鮮通信使として15名を従え、徳川家重の承襲祝賀のために來日した人物である。彼は、1790年に『朱子語類大全』を

編集し、1971年に編集された朝鮮版『朱子大全』（筆者が見たのは1984年、保景文化社、影印版）佚文輯録遺集「性理吟」の注釋も彼の「考異」によっており、朝鮮儒學界で影響力を持っていた人物である。

(45) 『正誼堂全書』所收「養正類編」十三卷本にも、『養正類編』二十二卷本（蓬左文庫所藏）にも、『朱子性理吟』は見えない。洪啓禧自身も「蓋全書所載也」と言い、直接確認していない。

(46) 「右朱先生性理吟。七言、百四十一章。九十三章、章四句。四十八章、章八句。出儀封張伯行所輯養正類編。蓋全書所載也。啓禧讀而喜之。若先生論性理諸書、地負海濱、有不可以卒乍究索。而之詩也、命題該備、造語明簡、雖其寂寥短篇、而華實得中、包括甚廣。使學之者、諷誦易而感悟切、與齋居諸篇可爲表裏也。或以爲、果係先生手筆、則及門之士、無一言表章之、何也。夫童蒙須知一編亦晚出、不載大全遺書、固不必於此、而獨疑之爾。已而讀高景逸集、有刻朱子性理吟序而、論其來歷甚詳……」。

(47) 「篇名性理吟、作訓蒙絕句。篇名下有別小序……道體・爲學等總目竝無……予讀之而瞿然曰、退溪先生之言、如此則誰敢硬主己見以爲必出於朱子乎。余未見退溪書而徑刻此篇。誠愧不敏、然既刻之矣。竝附其顛末於後、以致自訟之意云爾。」

(48) 高攀龍『朱子性理吟』は、『韓國古書總合目錄』1297頁によると、憲宗五年（1836）の高本が現在韓國の梨花女子大（二卷一冊）に残されていて、朝鮮王朝末期まで引き継がれていたことが確認できる。

(49) 「右詩九十八首、考之朱先生文集、惟易詩有之而命以下無有焉。按明正德年間、新安程叔玉載之其所輯晦庵詩集、而無訓蒙之號。叔玉序云、易・命・太極・先天・體用・居敬・人心道心・一貫・克己・感興諸作、皆發明道體之蘊奧、表章孔孟之心法、以及歷代之治亂、如諸指掌。漢唐諸作、安得同日語哉。」

(50) 『朱熹集』第10冊「版本考略」584頁242頁。

(51) 「又朝鮮吳祥所跋之本、題號訓蒙絕句、其下曰文公朱先生撰、卷頗無易詩而有天詩（割註）、有優游厭飲詩（割註）、卷末載觀書有感二詩（割註）。中開九十六首（割註）凡一百首也。斯詩胡敬齋信用之、李退溪評議之。敬齋所用未知其孰本。退溪之所議則正吳本也。予向依敬齋信之、後來以謂退之議得是矣。」

(52) 「答澤田春伯文書」、べりかん社、1978年、『新編山崎闇齋全集』第二卷、267頁。

(53) 闇齋刊『朱子訓蒙詩』は、東北大學・京都大學人文科學研究所・東京都立中央圖書館（岡文庫）・九州大學圖書館など所蔵されている。なお、本書については、田尻祐一郎『山崎闇齋の世界』（べりかん社、2006年）に少し言及されている。185～186頁。

(54) 『楠本端山・碩水全集』、葦書房、1980年、289頁。

(55) 「近讀文公朱先生性理吟、竊以爲初學之士、吟咏此詩、玩味其意、則庶幾無風流慷慨之害、而有益進於聖賢之大道矣。此書雖不載朱子文集、而明高忠憲先生嘗有序文。其傳歷歷可知也。因繕寫數本以頒同志之諸友云。嘉永七年甲寅九月。」

(56) 『楠本端山・碩水全集』所收「楠本端山と碩水」葦書房、1980年、277頁。

